

勇気のスイッチ

山口県 末武中学校 一年

加藤 肇

「断られたらどうしよう。」

「声をかけるのははずかしいな。」

「このまま寝たフリをして、見なかったことにしようか。」

ぼくの目の前には、重たそうな荷物を持ち大きなお腹をかかえた人が立っていました。ガタンゴトンと車両がゆれるたびに、バランスをくずしそうになるのか、足を大きく開いてふんばっているように見えたのですが、ときどき身は横に前へとゆれていました。まわりを見まわしたけれど、当然、空いている席はありません。優先席もうまっています。目の前の人に目をやると、ハンカチで汗をふきながら、つらそうに立っています。

「どうぞ」の一言だけ。たったそれだけなのに、勇気が出ません。言いかけては、何度も何度も言葉を飲み込みました。

「誰かこの人に席をゆずってくれないかな。」

「だれか、お願い。」

次の駅に停車したら、降りる駅ではないけれど僕が降りて、席をゆずろうかとさえ思いました。

そのとき、となりに座っていた小さな男の子が、大きなお腹を指して、

「この中に赤ちゃんいるの？」

「ぼくもママのお腹の中にいたの？」

とお母さんとの会話が聞こえてきました。ぼくは、「はっ」として、お母さんが話してくれたできごとを思い出しました。

ぼくがお母さんのお腹にいたとき、ベビーカーにお姉ちゃんをのせて、重たい荷物をもって信号待ちをしていました。すると通りかかった高校生が、「持ちますよ」と言って買い物袋をもって横断歩道をわたってくれたそうです。信号が点滅しても走れないし、どうしようかと思っていたとき、思いもかけないことがあって本当にうれしかったそうです。

ぼくが大きくなるまで、いろいろな人に支えられてきたのだと気づきました。自分がしてもらったことは、きちんとお礼をしないといけないと思ったとき、自分でもびっくりするくらい自然に、「どうぞ」と声をかけ席を立つことができました。その人は、

「ありがとうございます。いいんですか？」

と言いながら、席に座ってくれました。そのときの笑顔を見て、ぼくの心も笑顔になりました。

思っているだけでは、伝わらない。ちゃんと言葉にしないと。寝たフリを決めこまなくてよかった。ぼくの勇気のスイッチを押してくれた男の子に感謝です。

読み、書き、話すことで世界中の人とコミュニケーションがとれ、感情や思いを伝えるツールが言葉です。人を幸せにしたり、友達と仲良くなったりできる反面、使い方をまちがえると人を傷つける凶器にもなります。だれかの役に立つ行動とともに、思いやりのある言葉をかけられた側も、かけた側もうれしくなると気づきました。自分で勇気スイッチを押せるか自信はないけれど、くつをそろえる、ごみを捨てるなど、見て気持ちがいいなと思ってもらえることから始めてみようと思います。